



Title	日本における中国系移住者の人的ネットワークの構築 ：大阪在住者の事例に基づいて
Author(s)	郭, 文琪
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 265-274
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95093
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本における中国系移住者の人的ネットワークの構築 —大阪在住者の事例に基づいて—

Human Network Formation of Chinese Migrants in Japan From the Examples of Osaka-residing Chinese

郭文琪*
GUO Wenqi

Abstract

By the case of two middle-class Chinese immigrants living in Osaka who migrated to Japan with Investor / Business Manager Visa, this article explores their experience of lifestyle migration and the multiple human networks they built to support their life, economically and socially.

Contrary to previous studies that address overseas Chinese who build an intimate community based on locational proximity, the informants detached from urban life in China and refused to settle in Japan. Regarding the existing Japan-residing Chinese community, they remained connected with them while showing vigilance against them. Their emotional support came from the online communities of other Chinese living in China and Japan.

By adopting multiple unstructured interviews and participant observations, the article attempted to illustrate increasing global mobility, and lifestyle migrants are not necessarily eager to keep intimate relationships with the existing migrant community. They struggled with the reciprocity required by the migrant community. The psychological distance of lifestyle migrants addresses the problems of assuming overseas Chinese community as built on trust, exchange, and a sense of belonging. On the other hand, they remained connected to the community mainly because of human networks enabled by people from the same country.

Keywords: Chinese immigrants, lifestyle migration, human networks

I はじめに

日本の法務省が 2019 年に出した統計データによると、日本在住中国人の総数は約 81 万人である。このうち在留資格が「経営・管理」となっている者は、約 1 万 4000 人で 2010 年の 3300 人と比べこの十年間で約 4 倍に増えている。「経営・管理」の在留資格は、日本で貿易その他の事業の経営、または管理に従事するために発給される在留資格である。在留期間は 3 ヶ月から 5 年で取得がそれほど難しくないため、近年では日本での長期滞在を目的とした中国系移住者が多くなっている。こうした中国系移住者はそれ以前に来日した中国系移住者とは異なり比較的財力があり、中国で一定の資産を保有している場合も少なくない。在留資格制度を活用することで日中間を頻繁に往復することのできる彼ら彼女らは、移民の仲介や不動産業などニューカマーを含む中国人向けのビジネスを展開することが多い。

こうした中国系移住者たちは、多くの場合、血縁、地縁などのつながりを頼りにせず、個人として単独で来日し、また来日の目的やそのまま日本に留まり続ける意志が判然としないことが多い点でも、従来の「華僑」や「華人」、「新華僑」、「華商」として同定されてきた移民どうしの結びつきとはかなり性格を異にしている。彼らは、言葉の壁や在留資格の関係で、中

* 大阪大学大学院人間科学学科・博士後期課程

国人向けのビジネスをすることは多いものの、同胞でありながら、同時に見知らぬ他人である人たちに囲まれて暮らしている。彼ら彼女らの多くは、生計のために日本に移住したわけではなく、それぞれに経済的な理由以外の移住の理由を持つ。

本稿では、こうした従来の「華僑」や「華人」「新華僑」「華商」とは区別される「経営・管理」の在留資格を有し、2010年代以降に来日した一定の経済基盤を持つ新たな中国系移住者を「中国系新移住者」と呼ぶこととし、そのうちの二人である嬌さん（仮名）と熊さん（仮名）という大阪在住の「中国系新移住者」を起点に、彼、彼女がどのように人的なネットワークを広げようとしてきたのか、あるいは人的なネットワークを広げないでおうとしたのかについて記述する。そうすることで、中国系新移住者が自らをそのなかに位置づける社会的世界の一端を描いてみようというのが本稿のねらいである。

とは言え、こうした人的ネットワークや社会的世界は、調査者が俯瞰的に、また客観的に外から眺めてその様子を観察することができるものではない。嬌さんと熊さんにとって、私との関係も、彼、彼女の人的ネットワークの一部であり、彼、彼女が私に語ったことも、客観的な事実であるというよりは、人間関係を築くプロセスの一部である。この二人に対して、私はどのように来日したか、日本でどのように人と知り合いになっていったかなどについて「聞き取り」を行なったが、次第に調査の主眼は、二人が語ったことがどう変化してきたのかという点に移っていった。二人と私はどちらからともなく何度も繰り返し同じ話題について話したが、語る内容はその都度変わっていった。その変化は、二人と私が互いに人格的な信頼を構築していくうちに建前だけの答えが訂正されていく過程であったと言える。中国系新移民の人的ネットワークを記述するうえでは、調査者と調査協力者の関係が始めどうであり、その後、どう変化していったのか、そうした関係は、調査協力者とはならなかった人たちと調査者との関係とどのように違っているのかといった調査者にとって心理的に負担となる事実も交えて記述する必要があるのである。次の節では、私が調査協力者と出会う際に苦労したことともあわせて本稿で取り上げる二人と私がどう出会ったのかについて記述してみよう。

II 二人の中国人移住者が私と出会う

2017年ごろ私は中国から来日した人たちを対象とするフィールドワークをしていた。当時、私はいわゆる「老華僑」の団体に出入りしている、来日から20年程度経過した中国人や、新たな組織を立ち上げてそこで活動している人びとと知り合う機会があり、彼らに対しインタビューを試みていた。しかし、いざ私がインタビューを申し込むと、相手から断られることが多かった。ほとんどの人は、自分自身や所属する団体について知られたくないと思うのである。そのため、私はアプローチの仕方を変え、微博（WEIBO）や2018年頃に中国で流行していたライブ配信アプリなどの中国発のSNSメディアを利用し社交ニーズのある人をターゲットにすることにした。こうしたSNSメディアは20代から40代の中国人の間でよく利用されており、中国の友人や親族などと連絡をするために、日本在住の中国人の間でも普及していた。このSNSメディアを通じて出会ったのが本稿で取り上げる嬌さんと熊さんである。表1は嬌さんと熊さんの性別、年齢、出身地、在留資格、学歴、来日歴をまとめたものである。二人とも、ある時期に、短期滞在や留学という在留資格から「経営・管理」へと在留資格を変更している。

表1 インフォーマントの概要 (2020年インタビュー時)

仮名	性別	年齢	出身地	在留資格の変遷	学歴	来日歴
嬌	女性	38	遼寧省	観光→経営・管理	中国の専門学校卒	4年
熊	男性	41	山西省	観光→留学→経営・管理	欧米の大学卒	3年

一連のフィールドワーク経験から、私は相手の警戒心と人間関係を広げたい願望のバランスをうまくコントロールすることが、中国系新移民にとって人との出会いの条件となることに気づいていた。そしてそれを調査のためにいかそうとすると同時に、そういった人間関係の作り方自体に関心を持つようになっていた。二人への聞き取りを進めていくうちに、嬌さんと熊さんの警戒心も薄れていき、日常的な他愛のない会話も増えてきた。このような会話の増加は、来日もない彼らが人間関係を拡大していくことと並行して生じていることに気づいた。次に、嬌さんと熊さんと私との出会いについての記述を通して、二人が日本でどのように人間関係を広げようとしたのかについて述べてみたい。

1. 嬌さんにとっての私との出会い

私は、大阪在住の嬌さんがライブアプリ上で発信しているブログの視聴者として嬌さんの存在を知り、コメントを投稿したり、ギフト¹⁾を送ったりするうちに、実際に会う約束をした。はじめて嬌さんと出会ったのは 2018 年の夏頃で、このとき嬌さんは来日から 3 ヶ月ほどしか経っていなかった。嬌さんは日本語が話せないため、日本においても中国人の友達を作りたいとの思いから、インターネット上ではなく実際に私と会うことを決めたという。

後述するように、嬌さんは過去のネガティブな経験から中国出身のビジネスパーソンに不信感を抱いてきた。このため嬌さんは人的なネットワークを広げることにについて常に警戒していた。そのなかで嬌さんが私と親密になっていったのは、彼らとは違い私が留学生であったため、ビジネス上の利害関係を持ちえないと判断したからだと推測される。私は嬌さんに私の研究課題について何度も説明したが、会う回数を重ねていくにつれて、彼女は調査者と調査対象者という私と出会った当時の関係を意識しなくなっていくようだった。やがて私は嬌さんから日本語の通訳や翻訳のサポートなどを依頼されるようになった。

2. 熊さんにとっての私との出会い

私は嬌さんの他にも、日本に住む中国出身のブロガーを多数フォローしている。そのうちの一人が微博 (WEIBO) で知り合った熊さんである。熊さんは自身のブログで日本での旅行記録やグルメ探訪の情報を発信してきた。また熊さんはフォロワーを集めて絵画や映画鑑賞を主としたオフ会も企画していた。私はファンの一人としてオフ会に参加し、熊さんと知り合った。嬌さんと同様、熊さんも利害関係のある中国出身のビジネスパーソンに対して常に警戒していた。一方、学生である私は、日本社会における情報源であるとともに、自分に害を及ぼさない存在であると認識しているようであった。

このように嬌さんも熊さんも、情報の獲得を主目的として SNS を使い人的なネットワークを広げることにはそれほど抵抗がないものの、対面でネットワークを広げることには、警戒感をあらわにする。この違いは何を意味しているのだろうか。次章から、他者とのあるべき関係性についての二人の語りを参照することで、この違いについて検討していきたい。

III ライフスタイルを語る——嬌さんの場合

1. 「来日動機」が変わっていく

嬌さんは遼寧省で生まれた。地元の高校を卒業後、北京の体育系専門学校に進学し、卒業後は数年間北京で働いた。日本でオリンピックが開催されることを知ると、嬌さんは当時交際していた恋人と、東京でホテルを購入し民泊を始めようと計画した。ただ、東京のホテルを購入するには手持ちの資金が不足していたため、価格の安い大阪の 3 階建ての一軒家を購入することになった。

一軒家を購入するにあたり嬌さんはまず恋人とともに 2018 年に観光ビザで来日した。その後、この物件の購入を仲介した不動産業者の協力を得て、日本で会社を立ち上げ、在留資格を経

営・管理ビザに変更した。しかし、その後、恋人が精神面で不安定な状態に陥り、単身で帰国してしまった。嬌さんは一人日本に残り、会社の経営を続けた。

以上が私と知り合ったばかりのころに嬌さんが話した来日動機である。しかし、その後、私と嬌さんが親密になると当初話していたこととは違う内容を語るようになった。嬌さんによると、彼女は北京で何度かの転勤を経験した後、不安障害に陥った。嬌さんの恋人は東京オリンピックが開催されることが良いチャンスと思い、嬌さんを誘って一緒に来日した。嬌さんも来日して起業することが、人生をやり直すチャンスだと考えた。「在北京混不下去了，想来日本闯一下（北京でやっていけなくなったので、心機一転やり直すため日本に来た）」と。その後も、来日の動機について嬌さんの話は会うたびに変わっていった。

このように関係が深まっていくにつれて、来日の動機として語られるものが変わることは嬌さんに限らず、本稿では取り上げなかったほかの中国系新移住者にもよく見られた。嬌さんの場合、来日の目的の語りは自分の理想のライフスタイルを強調するものから、来日前の日常生活上のトラブルを原因とするものへと移り変わっていった。最新のインタビューで嬌さんが語る来日動機は次のようなものである。

嬌さんは、高校を卒業してから北京で就学、就職して、不動産価格の高い北京でマンションを購入した。彼女は北京でマンションを持つことが自分の成功を証明できると感じていた。しかし、収入の良い仕事を退職した後、ネズミ講組織に騙され、金銭的被害を受けていた。この一連の失敗によってストレスが溜まり、不安障害に陥ってしまった。その時、日本に行って投資をしたいと考えていた恋人と出会い、一緒に来日することになった。

嬌さんは恋人との出会いと来日が自分の人生を救った契機であったと振り返り、恋人との来日以降は、自分の精神状態も快方へ向かっていると感じていると語っている。もちろん、来日後に苦労やトラブルを経験しなかったわけではない。私との関係が深まるにつれて、嬌さんは徐々にそうしたネガティブな経験についても私に語るようになった。次に嬌さんのそうした語りを取り上げ、彼女が彼女の日本での経験を、ライフスタイルの理想に則して語る様子を確認してみたい。

2. ネガティブな経験

嬌さんは日本で経験した3つのネガティブな出来事について何度か語っている。不動産業者との軋轢の話、清掃スタッフとのビジネスの話、盗難にあった話である。これらの語りには、彼女の抱いていた理想と現実のギャップを垣間見ることができる。

（1）不動産業界関係者との軋轢

嬌さんと私が知り合って数ヶ月がたった頃、嬌さんは日本で経験した不動産仲介業者との間のトラブルについて語った。来日前、日本の物件を購入するため、インターネットを通じて不動産の仲介業者を探して福岡に在住する仲介業者（中国東北部出身）と知り合った。この人物を通じ、大阪の仲介業者の亮さん（仮名・中国東北部出身）と連絡を取る。嬌さんはまず観光ビザで来阪し、大阪の仲介業者を通じて一括払いで西成区の3階建ての一軒家を購入し、そこで民泊の運営を始めた。嬌さんは、この建物のうち、1階部分を元所有者である建さん（仮名・福建省出身）に彼の事務所として貸し出していた。しばらくしてほかの住民や近隣住民から建さんが騒音を発すると苦情が寄せられるようになった。すると、建さんはこれを不服に思ったのか、後日複数人の男性を引き連れて嬌さんたちの家の前に屯するなどの、苦情の告発に対する無言の抗議をやり返してくるようになった。この出来事で嬌さんと恋人は自らの身の安全を心配するようになった。しばらく経って、建さんがこの物件から退去したため、この事件は一応の解決を見た。

嬌さんは、来日前、中国国内の友人から「在日本，不要和福建人做生意，不要招惹东北人（日本に行ったら、福建出身の人と商売したらダメ。東北出身の人とは深入りしない方がいい）」というアドバイスを受けていた。それにもかかわらず、嬌さんは日本に来て、福建省出身の人物が所有していた物件を、東北出身者の仲介で購入してしまった。私が嬌さんと会うよ

うになってから3回目、嬌さんはこの一連の失敗を話してくれるようになり、「我来了之后发现，这个行业除了福建人就是东北人。没办法只能从他们手里买房子（日本に来てから分かったの。この業界は福建人のほかはみな東北人ばかり。彼らからしか家を買うことができなかった）」と語った。

（2）清掃スタッフとのビジネスの話

嬌さんは民泊を経営する傍ら、日本で積極的に交友関係を広げることに努めた。次に登場するのは、建さんの紹介で民泊の清掃スタッフの明さん（仮名・福建省出身）である。嬌さんは、明さんから、一緒に新たに民泊の経営をしないかと提案された。これに同意した嬌さんは、別の物件の購入に向けて、これまでの蓄積してきたノウハウを中国人スタッフに伝えながらともに準備をしていた。ところが、民泊のオープン直前、明さんは「私一人で運営したい」と話を切り出したため、それを了承するかたちで、嬌さんは新たな民泊の経営から手を引いた。このことについて、嬌さんは自分が利用されたのだと考えている。先のエピソードと同じく、明さんも福建省の出身であったことから、嬌さんは私に対して日本にいる福建人を十把一絡げにして悪く語ってきた。そうであっても、これが原因で嬌さんと明さんのあいだの労使関係は悪化していないようである。

（3）盗難のトラブル

これらのほかに嬌さんは、紅さん（仮名・山東省出身）からお金を盗まれたこともあった。紅さんとは、嬌さんがデパートで買い物の列に並んでいた時に、たまたまその隣にいたことがきっかけで会話が弾み親しくなった。二人とも女性の一人暮らしで、年齢層も同じだったので、すぐに打ち解けて、お互いのルームシェアのパートナーになるに至った。紅さんと一緒に暮らしている時、嬌さんは彼女から現金50万を盗まれた出来事を私に打ち明けてくれた。

民泊事業と並行して、嬌さんは頻繁に中国と日本を行き来する生活を送っていた。その中で、中国を出国するときに、現金50万円を持って日本へ入国した時があった。彼女はこの現金50万円のことを紅さんにも話したと記憶していた。翌日、ルームシェア先の部屋でスーツケースに入れていたはずのそれがないことに気が付き、犯人はルームシェアの紅さんだと断定し、彼女を問い詰めた。紅さんはこの疑惑を否定したため、二人のあいだで口論が起こった。このとき、嬌さんが日本語を話せないハンディキャップや、紅さんの在留資格の偽装申告など、お互いの弱みを握り合っている状況が明らかになったから、嬌さんはこの件を警察に通報しないと決めた。その代わりに、紅さんを説得しに彼女のバイト先へ通い詰めて、盗んだ金の要求をしつこく続けた。最終的に紅さんは、無くなった現金50万円を嬌さんへ返却してくれたため、この騒動は収まった。

私は三回目の聞き取りにして、嬌さんの口から紅さんの弱みをようやくと知ることとなった。その弱みとは、彼女がかつて技能研修生として日本で働いた後帰国し、再び日本入国するときに留学ビザを偽装して、そのまま日本で不法就労している事実だった。同様に、嬌さんも紅さんに後ろめたい弱みを握られていたように、お互いに隠し事をしない開放的なやり取りを日ごろから行っていたからこそ、彼女らの信頼関係は続いてきたといえるかもしれない。しかし、この盗難騒動は、お互いの弱みを相手に追及するために用いたことから、彼女らの関係がある程度損なわれてしまったのは明らかである。この経験を経て、嬌さんは自らの在日中国人への認識を改めている。つまり、特定地域出身の中国人の評判に依存することから、日本に入国する中国人全体を指して、彼らを油断のならない他者だと認識するようになっている。

これらの語りから、彼女が理想とするライフスタイルが大阪において必ずしも実現されなかったことが窺える。この一連のネガティブな経験により、嬌さんは日本に住む中国人に対して負のイメージを抱くようになった。嬌さんが人間関係を広げるのを躊躇するの、このためである。しかし、当初、私を含めた周囲にそれを語ることができなかった彼女も、現在ではネガティブな経験として語るができるようになってきている。このことは、嬌さんが他者との繋がりを完全に絶ったのではなく、来日の時点で彼女が理想とした人的ネットワークのあり方とは

異なるものの、現在の彼女なりの人づきあいの理想を模索しようとしているかにも見える。次にこの点について、彼女の他者とのつきあい方についてみていくことにする。

3. 人的ネットワークの築き方を変える

嬌さんは大阪で民泊を経営する中国人の微信 (WeChat) グループに参加するなどして人的ネットワークを広げてきた。その過程で、嬌さんは大阪の不動産情報について多くの情報を得ることとなり、自らが西成区で所有する3階建ての一軒家の資産価値は買値の4分の1ほどしかないことを知った。嬌さんは2,570万円の金額で物件を購入しているが、これは実際のところ、500万円ほどの価値しかないというのである。

購入後、嬌さんはこの3階建ての一軒家の改装費と家具代などとして、別途1,000万円を費やした。合わせて、3,000万円ほどをこの物件に費やしたという。嬌さんが真実を知ったのは大阪の不動産を売買する中国出身の業界関係者の間で売り手が多額の利益を得た噂が広まっていたからだだった。その話をする際、嬌さんは悔しさを滲ませていた。

「他们说，前房东靠这个房子赚了1,000万日元。这个事情在不动产圈传遍了。民宿圈自然也知道了。正好民宿群里的朋友跟我说起这件事。我一听是这说的不就是我们家的房子吗。感觉自己被福建人和东北人合伙骗了。（彼らは、元所有者がこの物件で1,000万円の利益を取得したと言った。この話は不動産関係の業界の間で広まっていて、民泊業界の人びとの耳にも自然に入ってきた。WeChatグループにいる民泊を経営している友人からその話を聞き、それって私の家のことじゃないかと悟ったの。福建出身の人と東北出身の人が手を組んで騙してきた）」つまり、彼女の意見では、亮さんはこの物件を500万円で購入し、その後400万円程度を改装費として充てたのち、嬌さんへ2,570万円でこの物件を販売したことになる。これまでの嬌さんの経験を振り返ると、来日生活の初期において、嬌さんはSNSを通じて日本での中国人との交友関係を構築しようとしたが、次で示すように、日本に先住する故郷を異にする中国人に幾度も騙された後、この交友手段が誤っていることに気が付いて、新たな交友手段を見つけている。

日本で民泊の会社を立ち上げた嬌さんは、法律上の問題を全て行政書士会社に任せていたが、行政書士の所属する会社から民泊関係の手続きの保証人として日本在住者を立てる必要があると言われる。その当時、嬌さんは日本に信頼できる友人がおらず、中国国内の友人を通じて名古屋に在住する中国人と知り合いになって、この人物にこの保証人を依頼して彼女のビジネスの危機をしのいだ。

今では日本に来てから一番信用できるのがこの中国の友人との繋がりを介して築いた人間関係だと彼女は述べている。これは、彼女にとって日本で中国人の友人を増やすことが来日生活の目標の一つだったが、何回かの失敗から学んだ後、日本での中国人との出会い方に関して、今の彼女にとって最も適切な手段を見つけたと解釈できるだろう。次の章で取り上げる熊さんの事例では、そうした修正はどのような意味を持つのかを検討していく。

VI ライフスタイルを生きる——熊さんの場合

熊さんは山西省で生まれ地元の高校を卒業後欧米の大学に留学した。大学卒業後、中国に戻り北京で働いていた。熊さんは日本が好きで、頻繁に観光目的で来日していた。その都度、微博 (WEIBO) で日本の観光地についての旅行記を発信し多くのファンを獲得した。2019年、熊さんは北京での仕事を辞め留学ビザで来日し大阪市内の日本語学校に通った。日本語学校卒業と同時に在留資格を経営・管理ビザに変更し不動産兼移民コンサルティング会社を設立した。彼は周りの友人に「財務自由 (financial independence)」を実現した者として称えられている。

1. ペットが飼える環境

来日動機について、熊さんは当初「我不喜欢国内的生活。来日本之前听说和日本人很难交朋友。但是，我来日本又不是为了和日本人交朋友。我是想在这边生活才来的。（私は中国国内の生活はあまり好きではなかった。来日前、日本人とは友達になることが難しいという話をよく聞いたけれど、私は日本人と友達になるためだけに来日したのではなく、日本で生活がしたい

からここに来た)」と説明した。来日の動機について熊さんの語りに変化はなかったが、大阪という場所を選んだ理由については時間を経るにつれて話す内容が変わっている。

大阪を選んだ理由について、当初、熊さんは、「首先是距离。中国和日本只有一个小时的时差。如果国内有时，我马上就能够回去。而且，我很多国内的朋友已经搬来了大阪和京都。我来大阪，和他们的距离也近了。（まず距離だ。日本と中国の時差はわずか一時間で、何かあればすぐに帰国できる。また、国内の友人の多くは大阪や京都に引っ越してきており、私は大阪にやってきてから、彼らとの距離も近くなった）」と語った。ところが、その後のインタビューで語るところでは、熊さんは大阪に来た理由を「大阪签证通过的速度比东京快。所以就来大阪了（東京より大阪のほうがビザを取るのが早い、だから大阪に来た）」と語ってくれた。

熊さんの来日の動機がライフスタイルに基づくものとも言えるのは熊さんがペットの犬を飼うことを来日の動機として強調するからである。中国国内のペットに友好的ではない雰囲気になえられず日本にペットを連れてきたのだという。日本に移住してから裕福な熊さんはペットを連れて、日本各地を旅行したり、グルメツアーをしたり、大阪にいる時には飲み会を主催したり、彼の友人の主催する飲み会に招待されたりして、望み通りの生活を送っている。

熊さんを介して知り合った彼の友人麗さん（30代・女性）も、来日の動機を理想のライフスタイルに絡めて語っている（麗さんは、日本に来る前、SNSを通じて移民仲介会社の仲介で来日し、移住後、その仲介会社を通じて熊さんと知り合ったという）。当初、麗さんは「国内的环境不好。我为了孩子才来日本的（中国国内の環境が良くなく、子どものため日本に移住してきた）」と語っていた。ただ、「環境」が政治・社会・自然のどの環境なのかは定かではなく、私が具体的な「環境」について踏み込んで聞いても、ただ漠然と「環境」と答えるのみであった。

その後、私は麗さんと再び会うことがあった。このときもう一度、来日動機について聞くと、以前とは異なる返事をくれた。

「我高中毕业后去韩国留学了。大学毕业后我读了一个容易拿学位的大学院。拿到硕士学位后就回国结婚生子了。但是总觉得还是不太行。就一直想出来。但是不想去韩国。因为韩国社会歧视中国人。因为日本跟韩国的基础设施都差不多。所以选择来日本。（高校卒業後、私は韓国に留学したの。大学を卒業してさらに学歴が欲しくて、修士号を取りやすい大学院に入った。学位を取ってから中国に戻り、結婚して子どもを育てた。それでもなんとなく良くないと感じ、また海外に出たいと思った。でも韓国は中国人に対する差別があるから二度と行きたくない。日本なら、韓国と同じようにインフラも整っている。だから日本を選んだ）」

熊さんとその友人の麗さんの来日には、彼らが考える理想的な環境の下で暮らしたいという動機をみてとることができる。麗さんは WeChat でしばしば日本での生活について発信し「憧れていた生活を日本で実現した」と語っている。

2. ライフスタイルの異なる人たち

熊さんは日本に長く住んでいる中国人にあまり好感をもっていない。「日本的华人圈是，全世界海外华人圈中最差的。我来日本之前就知道（日本の華人圏は世界のそれと比べて最悪だ。それは来日前から知っている）」。そのため、熊さんは日本に来てまもなく、部屋を探す際、中国人経営の不動産会社ではなくわざわざ日本人経営の会社を選んだ。つきあう友人も麗さんのように同じ来日時間の短い人に偏っている。また、熊さんはこのように長く日本に居住している中国人への先入観と関連させて、大阪の中華料理屋にも不満を抱いている。

「在这边开餐馆的中国人不认真经营。因为这里没有什么竞争。随便开个店随都有人来吃。所以这样的老板是有生存空间的（ここにいる中華料理屋の中国人オーナーは真面目に経営していない。ここには競争がない。だから誰でも適当に店を開くだけで、自ずと人がやってくる。だからこそこのようなオーナーの生存空間がここにある）」

熊さんにとって、日本に長く住んでいる中国人は前時代の中国人である。熊さんは、自分たちのような新しい中国人と前時代の中国人では生活しているコミュニティが異なっていると言う。前時代の中国人—その中にはいわゆる老華僑だけではなく、90年代にやってきた新華僑も含まれるのだが—が狭い中華街を「圏」としているのに対して、自分たちの「圏」は趣味が同じ人たちが繋がるもっと広いものだと感じているのである。

3. 趣味が同じ人たちとの繋がり

熊さんがつきあう同じ趣味の人とはどのような人たちだろうか。熊さんの日本での交友関係の中には、彼より前に来日している中国人もいる。ただ、それはいずれも熊さんの旅行記の読者である。彼は読者との親睦会を定期的に開催し、新たな友人を獲得している。このほか、熊さんと似たような他の中国出身インフルエンサーとも連絡を取りあい SNS という電子空間上の友人ネットワークから、現実の対人的社会的ネットワークへ移行している。

こうして新しいネットワークを広げるほかに、熊さんは中国国内にいらっしゃるから既に関わり合いである友人で、かつ日本に来ている人たちと定期的に会い、日本での生活経験をシェアして情報を交換している。私は熊さんが中国国内にいらっしゃるからの友人の山さん（50代・男性）と出会う機会があった。そのときの出来事を示す。

山さんは私が大学院生であることを知り、卒業後の進路を聞いてきた。私が「私は一人っ子だから将来帰国したい」と答えたところ、山さんは少し怒ったように大きい声で「为什么你非得回去啊（なんで帰る必要があるんだ）」と言ってきた。それで私は両親が中国国内にいらっしゃることを伝え、山さんはさらに怒りながら「你父母不死啊（あんたの両親は死なないのか）」と言い返してきたのである。私がショックのあまり答えに窮していると、「我一辈子在日本刷盘子都不愿意回去（俺はここで一生皿洗いをしてもいいから日本に残る）」と言ってきた。その後、私は熊さんの既知の友人の中であまり歓迎されなくなった。

同じ経験として、私は熊さんのより若い友人童さんに会った時もそのような対応を受けたことがある。彼女は30代の女性で、中国国内で結婚出産した子どもが1歳未満の時、子どもを置いて単身来日した人物だった。来日1年未満であり、私が帰国したいことを聞いて軽蔑の表情を見せた。その後、彼女は私に冷たい態度を取るようになった。こうしたあからさまな私への冷たい対応は、約3年間のフィールドワークの中で初めての出来事だった。

山さんや、他の熊さんの友人たちは、私の「帰国したい」という発言に対してなぜ不快に思ったのだろうか。その理由は、私のこの発言が、日本で生きようとする彼らの理想と食い違ったことに加えて、彼らの日本での現実の生活が思い描いた理想とは食い違っているということにあるのかもしれない。山さんの私への怒りは、現実に向けられた苛立ちでもあったように思われる。どちらにしても、彼らにとって趣味の合わない私は、彼らのつきあう相手ではなかったのである。

結びにかえて

ここまで本稿では、二人の中国人移住者を起点に、彼、彼女がどのように人的なネットワークを広げようとしてきたのかについて記述してきた。

嬌さんや熊さんは中国国内で一定の資産を持つ裕福層に属しており、経済的な理由が移住した動機にはなっていない。二人にある程度共通する来日の動機は、中国国内でのストレスから逃れ、異国である日本において、新たなライフスタイルを獲得したいという願望に由来する。彼らは来日前中国での出身地を離れ、北京などの都市で働いた経験を持つが、大都市での生活は彼らに疲弊をもたらす以外の何ものでもなく（実際、嬌さんと熊さんとほぼ同時期に来日した他の中国系新移民の多くは来日の動機について中国国内の都市生活での疲弊および日本への憧憬を理由として挙げている）、再度の移住によってもう一度ライフスタイルを転換する必要があったのである。新移住者の特徴として「旅行好き」という点が挙げられるが、これも彼ら彼女らがいかに北京など大都市での暮らしに疲弊し、そこから逃れたいという願望がいかに強

かったかを示すものであろう。そうしたこともあって、日本でのネガティブな経験にもかかわらず、嬌さんは依然として日本に移住してきたことは、よい選択だったと語るのである。

このように経済的な利益ではなく、ライフスタイルの追求を動機とした移住について、長友はミカエラ・ベンソンを参照し、「経済的理由や仕事や政治的理由など伝統的に主流であった移住理由以外の、より広範な意味での生活の質を求めている移住」を「ライフスタイル移住」と呼ぶ (Benson 2009: 213; 長友淳 2015: 24)。こうしたライフスタイル移住では、移住前に現地への観光滞在の経験が移住のきっかけになるということも指摘されている (長友 2015: 28)。本稿で取り上げた二人とも「経営・管理」の在留資格を取得する前に、観光ビザを取得した経験があり、移住後も日本各地を訪れ、その経験を SNS でシェアしていた。もちろん、日本政府が観光立国政策の実施や民泊業に関する規制を緩和したことも、日本に移住を希望する多くの人たちがライフスタイルの追求を可能にした条件の一つである。彼ら、彼女らは、移住先を理想的な生活の場ととらえ、移住先の在留資格制度などを活用しながら、中国国内での生活への不満や、中国を離れて海外で生活したいという願望、政治信条や文化的見解などの価値観、すべてをその人のライフスタイルとして、日本に移り住んでいるのである。

彼ら、彼女らが移住先で築く人的ネットワークも、こうしたライフスタイルの一部である。中国系新移住者の人的ネットワークを記述するうえで本稿は、調査者が調査協力者とうまく関係を結べなかったことも、彼ら、彼女らの人的ネットワークの特徴の一部であると考え、フィールドワークにおいて私がうまく人間関係を築けなかったことやインタビューを断られたこと、関係を断絶されたことなども記述してきた。そこから見えてきたものは、同族、同郷、あるいはライフスタイルの共有が移住者の間の人的ネットワークを自動的に生じさせるのではなく、関係を拡大、あるいは制限する振幅を通して、人的ネットワークが探りあてられるということである。本稿の対象である中国系新移住者の場合で言えば、彼ら彼女らはライフスタイルに関する価値観を共有するが、それは、価値観を共有する人たちどうしが始めから結びついているわけではなく、価値観が共有されているかを探るプロセスを経て、人的ネットワークとして結実するのである。本稿で取り上げた嬌さんと熊さんの私に対する語りは、会って話をするたびに変化していったが、それこそが人間関係を築く、あるいは他人との距離を置くプロセスの一部だったのである。

だとすれば、新旧の移住者たちがどのような範囲へ関係を拡大しようとし、どのような範囲への関係の拡大には慎重になるか、またどのような範囲へはまったく関係を拡大しようとしなのか、そして新移住者と従来の移住者の間の、関係を拡大する範囲のどのような違いが両者の間に警戒感と慎重さを生み出すのか、これらを明らかにすることが次なる課題となる。これまで華僑華人の人的ネットワークに関する研究は、ネットワークを客観的に俯瞰できるものととらえがちであった⁽⁴⁾。ある属性を共有する人たちが互いに相手に同じものを期待し、多くの場合、そうした期待が行為によって裏づけられるということが素朴に信じられてきたのである。人が地縁や血縁などのネットワークに基づいて移動しているように見えることはしばしばある。だがある人的ネットワークを選択することは、別のネットワークを選択しないことも意味している。接続と断絶を繰り返す動態的な人的ネットワークに自ら身を置いているとの自覚を持って観察することが、ライフスタイル移民としての中国系新移住者という本稿での理解をさらに進め、彼ら彼女らが「圏」の概念の複雑な構成を理解する糸口となろう。

注

- (1) ギフトとは、視聴者が配信者に対して贈ることのできる投げ銭である。
- (2) 国境を越えた移動や移動後の生存のために個人がどのように社会資本や文化資本を動員するかといったネットワーク論的な研究には、華商の間のビジネスを行う相互扶助の研究 (陳天璽 2001)、温州商人のネットワークの研究 (張華 2015)、在日福清人のネットワーク (李国慶 2004; 陸麗君 2016) などがある。

引用・参考文献

欧文文献

Benson, M 2009 *A Desire for Difference: British Life-style Migration to Southwest Franc.* O'Reilly, K and Benson, M eds. (2009): *Lifestyle Migration: Expectations, Aspirations and Experiences*, Farnham: Ashgate. pp.121-135.

和文文献

張華 2015 「温州商人の人的ネットワークの類型と役割」 『山梨学院大学現代ビジネス研究』 (8)、39-58 頁。

陳天璽 2001 『華人ディアスポラ——華商のネットワークとアイデンティティ』 明石書店。

—— 2002 「虹のメタファーに見る華商ネットワークの本質」 『アジア研究』 48 巻 1 号、37-59 頁。

長友淳 2015 「ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向：移住研究における理論的動向および日本人移民研究の文脈を通して」 『国際学研究』 4 (1)、23-32 頁。

樋口直人 2002 「国際移民の組織的基盤—移住システム論の意義と課題」 『ソシオロジ』 47 (2)、55-71 頁。

陸麗君 2016 「華人・華僑の移住と同郷的なネットワーク」 『評論・社会科学』 119、63-79 頁。

李国慶 2004 「在日福建省福清人の移住・生活・エスニシティ：国境を越える移住者の社会的適応とネットワークの構築」 『慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション』 (32)、61-71 頁。

ウェブサイト

出入国在留管理庁「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表 2019 年 12 月末」 (http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html、2021年1月3日参照)。

出入国在留管理庁「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表 2010 年」 (http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html、2021年1月3日参照)。

「出入国管理及び難民認定法第七条第一項第二号の基準を定める省令」

(<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=402M50000010016>、2021年5月20日参照)